

入道じゆんふうにはほをあげ、さほさしをしよせて、しやつがあきなひ物とりて、わかたう共になさけのませてとをれとて出たちける、くつきやうのあしがらども五六人、はらまききて、あぶらさしたるくるまだいまつ五六たひに火をつけて、天にさしあげければ、ほかはくらげれども、内は日中のやうにこしらへ、ゆりの太郎と、ふぢさは入道とは、大將として、そのせい八人つれて出だち、○中夜半ばかりに、長者のもとにうちいたりたり、○下

〔牛馬問三〕或人の曰、熊坂が事、義經記大全には、義經奥州下りの時、鏡が宿にて夜盗に入、義經に討れし盗の棟梁は、藤澤入道と由利太郎といへるもの也、今世に圖畫に傳ふるは、此兩人を一人にしたる姿なりと見へたり、又義經勳功記には、熊坂長樊と有、異國の長良樊噲が勇猛をかたどり、自長樊と名乗ると有、今は樊を範と書たるも有、いつれや是とすべし、曰、熊坂といふもの、有、其傳記を詳にせず、切義經記は、拙ふして且虚誕多し、是を實録に列しがたし、○下

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年○康元元年六月二日辛酉、奥州大道、夜討強盜蜂起、成往反旅人之煩、仍此間度、度有其沙汰、可致警固之旨、今日被仰付于彼路次地頭等、所謂、

小山田出羽前司 宇都宮下野前司○中 已上廿四人  
御教書云

奥州大道、夜討強盜事、近年爲蜂起之由、有其聞、是偏地頭沙汰人等、無沙汰之所致也、早所領内宿、宿居置直人、可警固、只有如然之輩者、不嫌自他領、不可見隱之由、被召住人等起請文、可被致其沙汰、若尙背御下知之旨、令緩怠者、殊可有御沙汰之狀、依仰執達如件、

建長八年六月二日

某殿

〔看聞日記〕應永廿四年閏五月廿六日、今夜北大路邊有騷動強盜云々、廿七日、夜前強盜數十人即